



オーストラリアの多文化主義を知るための五冊

濱嶋 聡

① Dr Martin Nakata, *Disciplining the Savages, Savaging the disciplines. Aboriginal Studies Press, Canberra, 2007*

本書は、二〇一七年九月の現地調査時に、クイーンズランド大学アボリジニ・トレス海峡諸島民研究所研究員 (Researcher, Sabai Island Language and Cultural Knowledge ARC(DL), ATSSS Unit, Office of the Pro-Vice Chancellor, Indigenous Engagement) である Mr. Al Harvey から紹介された学術書である。非先住民の研究者の観点から見たトレス海峡諸島民、その逆の先住民 (トレス海峡諸島民) の観点から見た非先住民研究者という両方の観点について述べられたこの学術書は、学究的世界と先住民経験の多義的な重複と矛盾に悩む者にとつて、いわば二者択一の知識を与えるものである。また、人類学者たちが、先住民のことを知り、理解するようになるうえで、その拠り所としてきた手立てを構築したともいえる非先住民による研究への単なる一般的な批判に終わることなく、それをも超越した域にまで導いてくれるものでもある。自らがトレス海峡諸島民である著者は、人類学がフィールドの学問に変わっていくうえで画期をなすものであるといわれる、一八九八年から一八九九年にかけて実施されたケンブリッジ大学によるトレス海峡諸島民調査に対して、痛烈

な批判的見解を示している。その長期滞在による参与的観察が重要な方法として二十世紀以降、多くの人類学者によって採用されるようになった。Nakata は、このトレス海峡諸島民コミュニティにて実施された言語学的、生理学的、心理学的、そして人類学的テストを入念に分析し、研究者たちの方法論や解釈に対して鋭く批評をしている。彼はまた、これらの洞察力を使ってトレス海峡諸島民教育によって知識を蓄積することについての最近の同様の研究をも明らかにしている。これらの知識を体系的に解体することによって、Nakata は、押し付けられた定義から解放たれて自由になるためのトレス海峡諸島民、そして彼自らのあがきを雄弁に語り、ケンブリッジ探検隊による理詰めの調査旅行がいかに個人的で政治的なものであったのかということを読者に気づかせる。彼は、現在、先住民が常に文化的接触を受けながら住んでいる空間が、いかに複雑であるかを認識することの重要性を指摘し、この空間における先住民への責任ある二者択一の理論的立場を提案している。

トレス海峡諸島民の場合は、異なる島の島民同士で結婚したり、他の場所へ移り住んだりして、血縁関係は極めて複雑で、祖先が、南太平洋、中国、日本、インドネシア、フィリピン、マレーシア、またはヨーロッパ出身ということも珍しくない。日本人の場合、その多くが戦前に西オー

ストラリアのブルーム、クイーンズランド州北部のパプア・ニューギニアとの間の海峡である、トレス海峡内の木曜島 (Thursday Island)、北部準州都のダーウィンへ真珠貝採取ダイバーとして渡った主に和歌山県紀南 (旧西牟婁郡、旧東牟婁郡・現田辺市、現串本町) 出身者である。なかでも中田、柴崎といった名前は一般的である。二〇一六年、二〇一七年と現地調査のためにお世話になったクイーンズランド最北端、ヨーク岬の五つの先住民コミュニティ、バマガ (Bamaga) のアボリジニ市長も、彼の母方の祖父 (マレーシア人) の親族が、Nakata (現地では、「なち」と発音) という日本人である。彼の祖父はアイルランド人で、その間に生まれた母親はアボリジニ (彼の父親) と結婚し、彼自身の妻はトレス海峡諸島民である。二〇一七年十月十日、龍谷大学にて開催された「オーストラリア学会ワークショップ “Rethinking Interaction between Indigenous Traditional Knowledge and Modern Knowledge” (「伝統知」と

「近代知」の相互作用——先住民の自然と文化に関する伝統知を手掛かりとして) での招聘発表者である作者、Martin Nakata 氏に、木曜島のバマガ市長の親族の墓を訪れた時のことを話題にして、墓に刻まれた市長の親族名 “Nakata” との関係について質問をしたところ、親戚であることが判明した。氏の母親は、トレス海峡諸島民、父親は、日本生まれの日本人である。現在は、クイーンズランド州、タウンズビルの James Cook 大学副学長補佐 (先住民教育・戦略) 兼アボリジニ・トレス海峡諸島民センター長であり、高等教育機関に勤務して二〇年以上になる。Nakata 氏は、木曜島で学校教育を受け、クイーンズランド北部及び最北端の多くのコミュニティと強い絆を保ち続けている。氏は、また、博士号 (James Cook University) を取得した初めてのトレス海峡諸島民でもある。

ここで、学会におけるこの著書への論評を紹介する：
Professor Nicholas Thomas, University of Cambridge

「Martin Nakata のこの著書は、かつて出版された人類学の書籍への先住民側からの批評に最も多くの焦点をあて、それを支持するものである。

極めて印象的で、厳しく、時には辛辣でもある。今日、オーストラリアにおいて学究的組織と先住民間に存在する多くの問題を抱えた相互作用に悩まされている者にとっては、必読書である。」

Associate Professor Regina Ganter, Griffith University

「Nakata は、自らの著書で彼自身、一流の先住民哲学者であることを明らかにした。」

Robert Kenny, Australian Humanities Review, Issue 46, 2007

「Nakata のこの著書は、現時において、先住民教育に対する政策を論議するうえで最も重要なものである。それは、Nakata が記述している文化的接触であり、Nakata という極めて有能である研究者、活動家による重要な貢献でもある。」

Shino Konishi, Australian National University, Journal of Australian Studies, Vol. 32, No. 2, June 2008

「Disciplining the savages: Savaging the disciplines は、トレス海峡諸島民の歴史、そしてまだ大部分が踏査されていないままの状態に残っているオーストラリア研究の分野を調査した極めて重要な作品である。さらに、この作品は、諸島民自らの視点に立ってその歴史を検証したものである。」

Sue McGinty & Tyson Yunkaporta, Journal of Royal Anthropological Institute, Vol. 15, No. 2, June 2009

「彼の作品は、先住民研究における重大な変化を表すものであり、それは、先住民の観点を中心に置くという方向転換であり、研究者自身に今までの研究者中心の観点をもう一度振り返って見直させるものでもある。彼の巧妙なタイトルの中に、脱植民地化を明らかに見て取ることができる。彼の研究における先住民の立場を対象物から主体へと効果的に変えるものである。しかし、この作品は、単に反植民地主義を支持するだけのものではなく、先住民研究の将来像、つまり先住民の立場に立った理論を提案するものである。」

Vicki Grievess, Cultural Studies Review, Vol. 15, No. 2, September 2009

「本作品は、西洋式高等教育が求める必要条件を全て満たし、賞賛に値

するトレス海峡諸島民としての最初の博士号取得者である著者が、その研究成果について記述した重要な文献である。それゆえ Nakata は、西洋式知識の習得やその先住民に対する影響について批評する能力を十分に有している。」

Peta Stephenson, *Australian Historical Studies*, Vol. 39, No. 1, March 2008

「Nakata のトレス海峡諸島民の教育に貢献したいという願望が、この本を極めて独創的な作品に仕上げ、先住民の知識、伝統、制度・組織を教授または学習内容に取り込みたく思っている先住民、非先住民学者にとつては、重要な供給源であることに疑いの余地はない。」

最後に、龍谷大学にて開催された「オーストラリア学会ワークショップ」時のことを再び振り返ると、カナダにおける先住民と非先住民の和解 (Reconciliation) に関連して、オーストラリアの現状についての会場からの質疑に対する「非先住民側から理解された和解という観念は一切認めない」という彼の毅然とした応答に、改めて彼が指摘する二者択一の姿勢を再認識させられた。二〇一八年二月のジェームズ・クック大学の再会が今から楽しみである。

②保刈実「ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民の歴史実践」、御茶ノ水書房、二〇〇四年

保刈氏には実際にお会いしたことはないが、氏がオーストラリア国立大学大学院に在籍中に長文のお手紙をいただいたことがある。まず、氏のプロフィールから紹介したい。小学校五年生の時、歴史で習った「金印」が見たいと、東京の国立博物館まで一人で鈍行に乗って行ったという氏は、中学校時代、内履き用青い紐使用、強制廃止を訴えて生徒会に立候補し、生徒会長に当選したが、それ以来、母校の新潟大学教育学部付属中学校では靴紐の規制はなくなったといわれる。一橋大学経済学部、同経済学研究科（修士）修了後、ニューサウスウェールズ大学、オーストラリア国立大学両博士課程で学び、後者から歴史学博士号を取得した。氏は、博士論文作成のために滞在したグリーンジ地方のアボリジニコミュニ

ニテイの長老、ジミー・マンガヤリ氏に影響を受け、歴史について真摯に向き合うようになるが、本書は、ガン発病のためにあと二か月の余命宣告を受けた中で、その博士論文から日本人読者向けに書き上げられた遺作でもある。ジミー爺さんによると、キャプテン・クックを長とする白人たちが犯した最も不道德なことは、「やあ、こんにちは」と挨拶もせず、何をするにも先住民に許可を求めなかったことにある。このことは、①で述べた真珠貝採取ダイバーとして、ブルーム、ダーウィン、木曜島に渡った日本人ダイバーにも多少、共通することであるが、そのために殺害された日本人ダイバーも存在する。また、ある長老の一人が語った、ケネディ大統領がコミュニニテイにやって来て「一緒にイギリスと戦おう」と言ってくれたことが土地返還運動の動機になったという話や、ダーウィンに上陸後、キャプテン・クックは、南へ向かい不道德なことを続けていった（実際に上陸したのは、現在のニューサウスウェールズ州）といった話を、単に「間違った、滑稽な話」と排除したり、「メタファ」としたり、「神話」としたりすることは歴史を真摯に受け取ろうとする姿勢でなく、それは植民地主義に基づいた不道德なことを行ってきた征服者をどのように見てきたかというアボリジニの歴史実践を受け止めることにはならないと批判する。このオーラル・ヒストリーは、筆者の言葉、「歴史すること」(Doing History) や「歴史への真摯さ」(Experimental Historical Truthfulness) という、権威者にまかせることなく自分自身が歴史家となって行うという歴史実践に基づいて書かれた学術書である。この著書完成後、二〇〇四年五月十日、メルボルンにて三十二歳という若さで亡くなった著者の功績をたたえて、オーストラリア国立大学に「保刈実記念奨学金基金(The Australian National University (ANU): Minoru Hokari Memorial Scholarship Fund)」、ニューサウスウェールズ大学インターナショナルハウスに、「保刈実記念奨学金制度 (University of New South Wales (UNSW), International House (IH): Minoru Hokari Memorial Scholarship Fund)」が設立された。

③鈴木清史『都市のアボリジニ——抑圧のはざま』明石書店、一九九五年

まず、②の著者、保刈実氏が、「わたしたちは、時代とともに変化（進化？）していくが、アボリジニは、昔のままでいなければならないという、僕らの自分勝手な理想のアボリジニの押し売りだが、多くの現代アボリジニにとって、どれだけ迷惑かわかったもんじゃありません。大学に通うアボリジニ、失業とアルコール中毒に苦しむアボリジニ、先住民の権利回復問題に熱心なアボリジニ、4WDでカンガルーを追いかけるアボリジニ、そして、儀式が始まると夜明けまで歌い踊り続けるアボリジニ。これらはすべて、オーストラリア各地で、今現在を生きているアボリジニであり、これが現代アボリジニの多様性なのです。都市や町に暮らすアボリジニに関心のある方は、ぜひ鈴木清史著『都市のアボリジニ』を読んでみてください」（「ほかりみのるのアボリジニの世界へようこそ」第2回：現代アボリジニの多様性）<http://www.dinkun-j.com/STORY/hokari/hokari2.html>）という書評をのせているほどの、現代アボリジニ

研究者にとつての必読書ともいえる。鈴木氏とお会いしたのは、私が、州立クイーンズランド大学大学院言語学研究科への派遣留学中、出身地の京都の紙袋を下げてキャンパスを歩いていた時、クイーンズランド大学大学院人類学・社会学研究科博士前期課程を修了されて帰国準備中の氏からお声をかけていただいたのが最初である。帰国後も、ジョージナ・アシュワース編『世界の少数民族を知る事典』の「Ⅲ アフリカ」（「北アフリカのユダヤ人」「エチオピアのファラシャ人」「アファル・イツサ」「コプト人」）及び「Ⅱ 西アジア」を氏と共訳させていただいた。

二〇一一年度の国勢調査では、オーストラリアの総人口約二一五〇万七〇〇〇人のうち、自らを先住民とみなす人は五四万八三七〇人、このうち、アボリジニのみの血統が、約四九万三五〇〇人（先住民の九〇％）、トレス海峡諸島民の血統が約三万二九〇〇人（同六％）で、残りの約二万一九〇〇人（同四％）が両方の血統であった。先住民の居住地としては、全体として三三％が各州都などの中心部に住んでいるが、白人と見

分けがつかない先住民も少なくない。また、白人との間に生まれ同化政策のもとに実母のアボリジニから強制隔離され白人家庭へ里子に出されたり、強制収容所に入れられ、アボリジニ社会・文化・言語の知識を全く持たず、アイデンティティの喪失に悩む「盗まれた子供たち (Stolen Children)」と呼ばれるアボリジニも多く存在するのが現代アボリジニ社会の現状である。シドニー在住のアボリジニ調査をもとに書かれた本書は、保刈氏も述べているように、現代アボリジニ社会を知る上で、研究者のみならず関心ある一般読者にとつても必読書といえる。

④鈴木清史『増補 アボリジニ——オーストラリア先住民の昨日と今日』明石書店、一九九三年

③の『都市のアボリジニ』は、鈴木氏自身が述べているように、文化人類学的な視点から都市部のアボリジニを対象とした、アボリジニが何を必要として、何に向かって生活をしようとしているのかを知ろううえで必要な微視的（ミクロ）な視点からの研究をもとにしたものであるが、④は、初版が一九八六年に出版され、オーストラリア社会におけるアボリジニの状況について総括的（マクロ）な視点から描かれている。出版当初、オーストラリア先住民は、「アボリジナル」、「アボリジニー」、「アボリジン」、「アボリジニ」など様々に呼ばれていて、「アボリジン」を「アボリ人」と誤解していた人がいたという笑えないようなこともあったという。また、日本での関心はそれほど高くなく、英国人が入植する前からオーストラリアには先住民が生活していたという事実さえ知らない人も多かったそうである。一九九三年の増補では、鈴木氏は、修正、変更も最小限にとどめ、本文中の「アボリジニー」という古い呼称を変更せずに使用している。増補版の刊行当時のアボリジニの状況を反映させる意味で、初版の「おわりに」にかわって、補遺として以下の書きおろしが追加された。（一）一九八一年以降のアボリジニ人口の動向とそこに見られる現象、（二）一九七〇年代中頃から導入された優先政策がアボリジニの社会経済的地位に与えた変化、（三）拘留されているアボリ

ジニの間で頻発している非正常死の問題、(四)オーストラリアの国策である文化多元主義がアボリジニに与えた影響。なお、この補遺では筆者の関心を反映させて、当時日本でも定着しつつあった「アボリジニ」という呼称を採用し、統計だけの紹介・分析に加え、現地で得たアボリジニたちの「生の声」も加えられ、新しい状況報告もなされている。

⑤ 藤川隆男編著『白人とは何か？ ホワイトネス・スタディーズ入門』
刀水書房、二〇〇五年

第I部では全般的理論、第II部では白人の歴史的形成、第III部では非白人の側から見た白人、第IV部では白人性の構造について述べられている。本書の特徴的なことは、学生による各章の要約と感想、著者による感想へのコメントが掲載されていることである。編者も述べているように、白人性（ホワイトネス）の問題が、近年、歴史学や文学、女性学や人種研究、社会学や法学、教育学や心理学など人文・社会科学の広い領域で注目を集めるようになってきているが、この本は、白人研究を日本で初めて体系的に解説した書物である。特に、第十二章「歴史としての白人像——オーストラリア先住民のオーラル・トラディション」は、アボリジニ研究者としては興味深かった。内容を一部紹介すると、キャプテン・クックは、アボリジニにとっては征服者で、植民地化の実行者である。このクックと対照的に、アボリジニに抑圧や死をもたらさないで、反対にドリームタイムの精霊と同様に、法や秩序をもたらし、共感すべき一人の白人としてアイルランドからの流刑囚の息子、ネッド・ケリーがあげられている。彼は、既存の権力に疑問を持ち、アウトローとなり、警察官との銃撃戦で負傷後捕えられてメルボルン刑務所で絞首刑にされた人物である。ビクトリア・リバー・タウンズのヤラリン族の人々の間では、このネッド・ケリーの物語も伝承されているといわれる。

(はましま やとし)